# 医療系大学生のグローバルな視点を育む海外研修の活動報告

" Report on A Study Abroad Program for Students of Health Care: Developing Global Perspectives "

○大堀美樹[1]，松尾まき[1]，岸達也[2]
Miki Ohori, Maki Matsuo, Tatsuya Kishi
1 東京医療保健大学　医療保健学部，2 東京医療保健大学　東ヶ丘看護学部
Tokyo Healthcare University

**【背景と目的】**社会の国際化やグローバル化が進み、医療分野においても、異文化理解や多文化共生社会に対応できる人材が求められている。2023 年に行われたＧ７広島サミットでは、Ｇ７各国の学生の交流をコロナ禍前の水準に回復し、それ以上の拡大を図ることの重要性が共有され、大学等の高等教育機関におけるグローバルな人材育成がますます期待されている[1)]。

本学では参加希望学生に対し、毎年海外研修を実施してきた。2020 年度から 2022 年度は、新型コロナウイルス感染症により現地開催が困難となり、オンラインによる海外研修を実施してきたが、2024 年 3 月にオーストラリア（以下 AUS）での全学合同研修を再開した。研修目標の達成と共に、本学が目指すグローバルな医療人育成に向けて工夫した点を整理し、全学合同の海外研修による学びと効果を明らかにする。

**【方法】**2023 年度の海外研修は、AUS グリフィス大学にて、2024 年 3 月 10 日～3 月 19 日の 10 日間で行った。加えて、3 日間の事前研修、出発前の結団式を行い、研修終了後は研修評価のための無記名のアンケート調査を行った。アンケート内容は、学年などの個人属性、事前学習の効果、プログラム全体の満足度、それぞれのプログラムの満足度、個人目標の達成感などであった。

研修の目的①大学の授業と現地での生活を通して生きた英語を学ぶ②看護や医療情報に関する講義や病院見学を通して AUS の医療について学ぶ③ホームステイや授業を含む研修プログラム全体を通して異文化を体験する、の達成に加え、本学のビジョンである「グローバルな視点を持った医療人の育成」を目指し、「多様な価値観の受け止め」や「他者との協働」の力を育むために、引率教員で以下の点を工夫した。

1) 研修前に学生自身が個人目標を設定した。

2) コロナ禍以前は参加学生全員が一つのキャンパスに集まり、事前研修を行っていたが、2023 年度は、出発前の感染リスクを考慮し、オンラインで実施した。他学部・他学年の学生交流を促進するため、オンラインの小グループセッションを複数回設け、英語研修クラスは他学部・他学年の混合グループで編成した。

3) 研修終了後、グループ別の『研修の記録』と個人による『エッセイ』を作成した。記録のテーマは①英語研修、②AUS の医療、③ホームステイと異文化体験のいずれかとした。エッセイは研修体験や学びなど自由に記録してもらった。

**倫理的配慮**：報告書・エッセイ等の著作物、アンケート内容を学術集会等に使用・掲載することについて研修開始前に口頭で説明し、承諾書を用いて同意を得た。同意の有無や内容が成績に影響しないこと、不利益がないことを保証し、データは個人が特定されないよう取り扱った。開示すべき COI はない。

**【結果】**研修参加者は 6 学部・学科の 46 名で、4 年次生 3 名、3 年次生 16 名、2 年次生 15 名、1 年次生 12 名であった。研修内容は、5 日間の英語研修、医療研修（看護・医療情報の講義と病院研修）、野生動物園見学等の文化体験、現地学生・ホストファミリーとの交流で、プログラムは全日程予定通り遂行された。

アンケートの回答者は 38 名(回答率 82.6%)で、研修プログラムの満足度は、大変満足 22 名・満足 16 名であった。多くの学生が「学ぶ時間と自由時間のバランスがちょうど良いプログラムだった」「英語と AUS の医療に関する講義が両方受講できてよかった」「大学での学習、ホストファミリーとの時間、フリー時間全て充実していた」とプログラムのバランスや学びの多さを評価していた。一方「現地の方や学生ともっと交流したかった」「AUS の医療現場をもっと見たかった」と、現地での交流機会や施設見学機会の充実を望む意見も散見された。

医療研修については、「日本と AUS の医療の違いを知ることができた」「海外の病院を実際に見て回ることができて良かった」と視野の拡大を評価する声が多かったものの、「内容が少し難しかった」「自身の専攻科ではない講義（看護または医療情報）の内容が少し難しかった」との意見もあった。

個人目標の達成感は、達成感を 10 段階で評価し、9～10 が 12 名、8 が 12 名、7 が 7 名、4～6 が 7 名で、平均達成感は 7.9 であった。全員が研修記録や個人エッセイの作成に取り組み、研修のまとめを行うことができた。テーマ①では英語力の強化に加えコミュニケーションに必要な姿勢や意識に関する気づき、②では、AUS の文化を反映した医療の特徴や専門職の働き方に関する学び、③では肌で感じた AUS の生活や文化を体験して得た感動や驚きなどが示されていた。個人エッセイには、体験内容や学びに加え、自身の視野の広がりやマインドの変化・自分の強みの発見など自己成長に関する内容、他学部・他学科、他学年の学生との新たな出会いや交流で得られた刺激などが示されていた。

**【考察】**参加学生は総合的に満足度の高いプログラムであったと評価しており、全学合同の研修は、学生の視野を広げ、多様性や異文化の理解や受容に加え、新たな人間関係の形成や自己成長を促す機会となったといえる。医療研修の部分では、学年や専攻領域での習熟度の違いにより難しかったと感じた者もいたと推察される。事前学習で AUS の医療制度や医療の特徴を学ぶ時間を設けていたが、今回は知識準備よりも多くの時間を「安全」に渡航するための準備としたことも影響していると考えられ、今後の検討課題である。

＊引用文献 1)文部科学省.令和 5 年度文部科学白書. 第 2 部 文教・科学技術施策の動向と展開. https://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/hpab202001/mext_02820.html